もうひとつの長征

――大後方への旅（二）

楠原俊代

三

長沙臨大については、一九三七年八月南京で長沙臨時大学籌備委員会が成立している。教育部は委員として蔣夢麟、梅貽琦、張伯苓、楊振声、胡適、何廉、傅斯年、朱経農、皮宗石、顧毓琇を任命する（主任委員は教育部部長の王世傑）。このうち張、何は南開、蔣、胡、傅は北大、梅、顧は清華、楊振声は教育部を代表し、地方人士の代表である朱経農は湖南省教育庁庁長、皮宗石は湖南大学校長で、朱、皮ともにかつては北大教授であった。また常務委員は北京大学校長蔣夢麟、清華大学校長梅貽琦、南開大学校長張伯苓、秘書主任は楊振声とし、校舎・校地の借り入れ、予算の配分、学部・学科の設置、教員の招聘と学生の受け入れ、設備の新設等にあたらせた。それと同時に教育部は中英庚款董事会から長沙臨大開設費として二五万元を借用する。

そして、九月一三日には長沙で第一回籌備委員会が開かれ、同月二八日から正式に国立長沙臨時大学の名称が用いられる。

当初の予定では、

（一）校址　大学本部は長沙聖経書院を借り、事務室は聖経書院宿舎に置く。宿舎は男子学生用には四十九標の兵舎を借り約千名を収容、女子学生用には聖経書院近くの涵徳女学校を借り百名から二百名を収容する。工学院は湖南大学工学院を借りて授業をする。

（二）設備　三大学の長沙まで搬出してきたものを使用するとともに、工学院は湖南大学工学院の機器設備を使用する。図書は国立北平図書館と協力して双方が五万元ずつ出して購入する。防空設備としては四十九標の丘に防空壕三〇個を掘り、一個につき三〇名、全部でほぼ一千名を収容する。

（三）経費　大学開設に要する経費としては図書費五万元、理・工学院基本設備費一五万元、その他の設備費五万元。経常費としては給与六〇％、校地・建物の借用料五％、事務費一〇％、設備費一三―一八％、予備一二―一七％。

ということであった。

だが実際には長沙城内に十分な建物はなく、文学院（学院とは学部のこと）は南岳の聖経書院に設置され、長沙臨

時大学南岳分校とも称された。また三大学の図書、理工系の実験器材等の大半は搬出できず、搬出できたものも長沙にはまだ到着しておらず――『北京大学校史』によれば、清華大学が搬出した一部の図書・機器設備も、運搬の途中、日本軍の爆撃で大きな損失を被ったという――、このため理学院の各系はおもに長沙の湘雅医学院の各種設備を借用。工学院の土木系は長沙城内に置かれたものの電気系と機械系は岳麓山の湖南大学工学院の教室と設備を借り、航空工程研究班は南昌航空機械学校（江西省）で、化学系は重慶大学（四川省）でそれぞれ授業を受けざるをえず、長沙臨時大学からも各校に教授を派遣、授業を担当することになった。土木系が長沙城内に置かれたのは、清華の学生が山東省の実習地点から教学に必要な測量器械をもってそのまま長沙にむかったからであった。

図書についても経費に限りがあり大量に購入することはできず、長沙臨大と北平図書館の双方がそれぞれ四万元ずつ出しあって購入することになる。また一〇月六日には臨大予算の配分比例を給与六五％、事務費一二％、物品購入費一四％、特別費二％、学生用費七％に修正、同月一九日にはさらに経常費をきりつめ、五千元を困窮学生救済のために貸与することを決定する。

学部・学科組織については三大学本来のものに若干の変更が加えられている。北大は中国でもっとも古い歴史をもつ大学ではあるが、規模はさほど大きくはなく、文・理・法の三学院、一三学系があるだけで、学生総数も約一〇〇〇名にすぎない。南開もまた文・理・商の三学院があるだけで、北大よりもさらに小さい大学であった。清華だけが規模も大きく、文・理・法・工の四学院で学生数も最多であった。長沙臨大開設にあたっては、これらをそのまま設置することはできず、南開の商学院は合併して法商学院に、北大の地質学系と清華の地理系は地質地理気象学系に、北大の教育系と清華の心理系は哲学系と合併して哲学心理教育学系とした。本来の形がそのまま保持されたのは清華の

工学院のみであった。[1]

また校長はおかず、大学運営は三大学の校長蒋夢麟、梅貽琦、張伯苓の組織する常務委員会によってとりおこなわれた。四学院院長の人選は、工学院は清華にのみあったため清華の施嘉煬が院長となったが、その他の三学院は一校から一名ずつだし、文学院院長は胡適（北大）、理学院院長は呉有訓（清華）、法商学院院長は方顕廷（南開）がそれぞれその任についた。[2] 同様に総務長は北大法学院院長の周炳琳、教務長は清華社会学系主任の潘光旦、建設長は南開秘書の黄子堅。[3] なお、当初は院長の下に系主任はおかれず、各系教授の互選により系主席を決め、これが各系の業務を処理した。ほかに軍事訓練総隊もおかれ張伯苓が総隊長となったが、実際の責任者は軍事管理組主任の毛鴻（教官）であった。

以上のように三大学の聯合にさいしては、長沙臨時大学籌備委員会の人選をも含め人事の面では周到な配慮がはらわれている。抗日戦争勃発以後、沿海地区の大学は続々と大後方――重慶に移った国民政府治下の西南・西北地区――に移転、それにさいしては上海の私立の復旦大学と大夏大学などのように多くの大学が聯合という形をとった。だが解散にあたっては西北聯大をもふくめ一つとして気まずい思いをすることなく別れたものはなかった。終始一貫して協力関係が保持された唯一の例外がこの西南聯大なのであったという。

西南聯大は三校の聯合とはいえ、実質的には北大と清華を主とするものであった。しかもこの北大、清華はともにきわめて個性の強い大学であり、校風もおおいに異なっていた。

清華大学の前身であった清華学校（一九一二年一〇月～二八年八月）は、アメリカ留学生の派遣養成を目的とする八年制の学校で、その制度、内容のすべてはアメリカ模倣であった――中等科四年、高等科四年で、将来学生がアメ

リカに留学したとき、ただちに大学三年に編入することを前提にした構成になっていた。これに反し北京大学の前身である京師大学堂（一八九八年一二月～一九一二年五月）の学生には、たとえば一九〇三年の郷試合格者（挙人）にして日本留学の後すでに教師となっているものや現職の官吏なども少なくなく、政府主催の高級講習班といった感もあり、もちろん学生の大半が妻帯者であった。

このような創設以来の歴史の違いから、校風にも以下のような大きな違いがあったのである。

（一）中西の相違　清華の英語、とくに会話能力の水準はきわめて高く、これに反し北大では英文学専攻の学生でさえ流暢に英語を話せるものはいくらもおらず、外国へ留学するものもごくわずかであった。娯楽の面でも清華の学生は映画を見るのにたいし、北大の学生は京劇を聞く。また清華の学生はふつうトランプのブリッジをしてあそぶが、北大の学生でブリッジのできるものはいくらもいないのにたいし麻雀なら知らないものはない。

（二）老幼の相違　創設時からの校風として清華の方が一三歳前後の生徒が入学してきたことから若々しく活発であったのにたいし、北大には何事につけ大人びた「老気横秋」の風があった。

（三）政学の相違　清華が学術研究に重きをおく学校であったのにたいし、北大は非常に政治的色彩の濃厚な学校であった。創設時においてもそうであったし、第二章にも記したとおり、五四新文化運動では指導的な役割をはたし、学生たちは積極的に政治運動に参加、日中開戦以前における抗日学生運動の重要陣地でもあった。北大教授で中国最初のマルクス主義者李大釗が、一九二〇年三月マルクス学説研究会を組織したのも、同年一〇月北京共産主義小組を組織したのも北大においてであった。

だが、以上のような校風における大きな相違にもまして、聯合の素地となる面もおおくあった。まず両校は同様に高水準の大学であり、これまでにも嘱託として教授の交換がおこなわれていた。とくに北大では清華の教授を招くことにより積極的であった。また一九三七年の夏に清華・北大ははじめての統一入試をおこなうことになっていた。試験場は故宮の太和殿で、すべての準備はととのい受験生の入場を待つばかりになっていたのが、蘆溝橋事変のために実施されるにはいたらなかった。このほかに両校の教授は互いに他を母校とするものが多かったということもある。北大はもっとも歴史の古い大学であったため、初期における清華教授には北大出身者が多かった――学校行政にもっとも影響力をもち清華の五覇とも称された五人の教授のうち劉文典、馮友蘭、朱自清の三人が北大出身であった。その後清華を出て留学したものが増えてくるにしたがい、今度は反対に北大教授のなかに清華出身者が増え、その数は枚挙にいとまがないほどとなった。たとえば胡適も清華の官費留学生であった。両校はたがいに「婆家（ポオチア）」（嫁ぎ先）と「娘家（ニアンチア）」（実家）のような関係にあったといわれる。さらに梅貽琦は張伯苓の創設した南開中学の第一回卒業生（首席）であった。

ここで南開大学についてふれておこう。南開大は南開中学が発展して設立された私立大学で、南開中学もまたもとは小さな私塾から始められたものであり、すべては張伯苓ひとりの手によって創設、運営されてきたものである。張伯苓（一八七六～一九五一）は天津出身、一九九四年天津北洋水師学堂を首席で卒業。日清戦争ののち列強による中国分割がすすめられるなか、張伯苓みずからも通済艦見習いとして威海衛が日本の手からイギリスの手に渡るのをつぶさに目撃し、海軍を辞する。中国が強国となるためにはまず教育から着手しなければならないとその重要性を痛感し、教育による救国を決意したのであった。中学の設立は一九〇四年、大学は一九年に成立。文・理・商の三学科、

四〇余名の新入生から始められた大学は、三七年までの一八年間に文・理・商の三学部、学生総数約五〇〇名にまでなった。その他に、二二年には女子中学が、二八年には小学部が設立され、南開中は北平の師大附中とともに中国最良の中学にかぞえられていた。ここまで発展してきた南開大も一九三一年の満州事変以後、天津が最前線となったため、三五年には学校移転の準備にかかり、三六年重慶近郊の沙坪壩に南渝中学を設立する。この南渝中学をのぞく南開大とその附属学校のすべてが三七年七月末の日本軍の攻撃によって灰燼に帰したのであった。

とまれ三大学は校風における大きな相違にもまして元来親密な関係にあったとはいえ、以上のように人事の面においても周到な配慮をはらいつつ、戦火のなかを移転、聯合というはじめての試みを進めていく――聯合の当初には、北大放任、清華謹厳、南開活発、そして西南聯大はこれらを寄せあつめた「ごった煮」なのだといわれていたのが[4]、解散のさいには校風の差異もほとんどすっかりなくなってしまうまでになっていたという[5]。

四

長沙臨大の学生総数は一九三七年一一月二〇日の時点で、一、四五二名、そのうち清華六三一名、北大三四二名、南開一四七名、新入生一一四名、他大学からの委託学生二一八名。新入生は北京・清華両大学が合同して湖北省武昌で募集、採用したものと南開大附中から入学したものの合計。他大学からの委託学生とは、戦禍によって自らの学校を奪われた学生で臨大の臨時学生・聴講生となることを認められたものである。教員数は清華七三名、北大五五名、

南開二〇名、合計一四八名。

日中開戦直前の一九三六年度における清華の教師数は二一〇余名、そのうち教授九〇名、学生数は一、二二三名。一九三七年の北大教授は七七名、講師六〇名、学生は一、〇一一名。南開の学生総数は約五〇〇名であったから、卒業生の数を引くと何百名もの学生が長沙には来ていないことになる――長沙臨大の学生総数から新入生と他大学からの委託学生の数を引くと一、一二〇名となる。遅れて到着する学生もいたが、顧毓琇の記すように、学業を中断し、軍隊または戦時任務に志願した学生も多かったのであろう。(6)

ここで平津地区から長沙臨大にむかった学生の回想録をみてみよう。

『清華大学校史稿』によれば、蘆溝橋事変が勃発したとき、卒業生を除く一、二、三年の学生は軍事演習をおこなっていたという。しかし、参加していなかった学生もいたようである。

郁振鏞の「長沙臨時大学一段古」によれば、かれは七月七日の夜は友人たちと清華構内の工字庁の蓮池のところで涼みながら雑談していた。このとき西方から砲声のとどろきが聞こえてきたが、宋哲元麾下の第二九軍が付近の農村で軍事演習をおこなっているものと気にもとめなかったという。事件のことは翌朝の新聞で知る。その後の数日は情勢が緊迫を増し、鉄道も不通となる。七月の中旬をすぎると北平一帯はほとんど日本軍の占領下におかれるが、交通は徐々に回復してくる。そして七月一九日北平・上海間の列車が再開すると、郁振鏞はその第一号に乗って清華園を離れ南下し、郷里の浙江省にむかう。

軍事演習に参加していなかった郁振鏞の場合、早い時期に北平を発つことができた。七月一九日といえば、聞一多もこの日北平を発ったのであった。

だが、北平郊外の西苑の兵営で軍事訓練を受けていた学生たちは、このときはまだ解散になっていない。蘆溝橋における日本軍の砲声を聞いたのもここでだったという。

清華の学生費自圻はこのときの状況について次のように記している――事変後の二週間ほどというものは、まったくやりきれないような日々がつづいた。狂ったように鳴り響く警報を毎日どれほど聞いたかしれない。日本の小銃隊が西苑の兵営に夜襲をかけるという謡言が飛び交い、訓練もいっ解散されるか分からないといった状態であった。郷里は南方のため、鉄道はいつ回復するのか問い合わせても、北平・上海間はながらく不通とわかっただけで、いっそう気が揉めるばかりであった（「生平最難忘的一段経歴」）。

軍事訓練が予定をくりあげて解散となったのは七月二一日のこと。状況は混乱をきわめ、このため費自圻は清華園に置いてある自分の荷物もそのままに、急いで前門駅に駆けつけ上海行きの切符を買いもとめる。そのかれは、

「このとき前門駅にはもう到るところに日本憲兵がいた。そして北寧路（北平・瀋陽間の鉄道）沿線の豊台駅では面構えも憎き日本兵が銃を担いで立っていたのである。駅名にはとつぜん日本語が付け加えられ、北平城内にも太陽旗（日の丸の旗）が掲げられていた」（前掲文）

と記し、「これがどうしてわが山川うるわしき少年中国であろう」と憤っている。

費自圻が北平を発った日は不明であるが、西苑でおなじく軍事訓練を受けていた清華の学生翁同文は、衣服書籍などほとんどそのままに手提鞄だけをもって、七月二五日の朝列車に乗り、天津経由で郷里の浙江省にもどったという

（「従入学時説起」）。その日の夜には北寧路の小駅廊坊――北平と天津のほぼ中間に位置する――で日中両軍間に衝突がおこる。翁同文も出発がもう少し遅れれば危険なことであった。

それからわずか三日後の七月二八日早朝、日本軍の華北総攻撃が開始される。攻撃目標は中国第二九軍の主力が駐屯する南苑で、同日午後一時にはこれを占領してしまう。このとき中国軍側の戦死者は五千名あまり[7]、南苑の兵営内にいた千名近い平津地区の学生も大部分が国難に殉じたという[8]。

しかし清華、北大、南開の学生がこのとき殉難したとの記録はない。

当時の北大秘書長で中文系教授の鄭天挺は、蘆溝橋事変勃発後も北大に留まっていた学生はいずれも経済的にきわめて困窮していたため、学校を離れるのに各人に二〇元ずつ支給した。したがって七月二八[ママ]日北平が陥落したときには校内に学生は残っていなかったと記している（「滇行記」）。このような動きは清華にもあったようで、清華の政治系主任であった浦薛鳳は、北平に留まっていた学生たちは学校から金を借りようと、群れをなして騒ぎたて、学校側も最後には各人に二〇元ずつ貸与することを決定、平津地区の清華学生は各人のおかれた状況の如何にかかわらず一律に二〇元を受けとったと記している[9]（「旧都小隠」）。

そして平津間の鉄道は七月末からまた不通となる。清華の学生たちの大半はしかし費自圻、翁同文の回想録にも記すように、軍事訓練の解散後このときまでに郷里に帰ったものと思われる。清華の教職員は大部分が学内にいたが、七月二九日北平が陥落するとただちに城内に移る。浦薛鳳もこの日の夕方、家族とともに城内の知人宅に落ち着く。だが出産間近の妻と清華に留まった教員もいたという。浦薛鳳の妻も六月二七日、四人目の子供を出産したばかりであった。

浦薛鳳の前掲文によれば、このあと城門はかたく閉ざされ、電話は不通となり、砲声がかすかに聞こえて、清華との連絡は完全に絶たれてしまったという。それから数日後、事態がやや落ち着いてから、浦薛鳳は清華にもどり書籍、講義ノート等を人力車を雇って運びだす。城門が開くのは一日に四回で、他の同僚たちも危険をおかし人力車や車を雇って書籍等を運びだした。

七月末から一週間あまり不通となっていた平津間の鉄道は、八月八日の日本軍北平入城ののちに回復する。しかしこのあと列車は各駅に停車するようになり、銃剣を持った日本兵による検問が各駅でなされるようになった。このため平時なら二、三時間で着くところが一二時間以上もかかるようになり、列車はたいへんな混雑をきたし、日本兵による金銭略奪、乗客逮捕、女性への暴行といった多くの謡言もながれた。また一日に何百という学生が天津にむかったが、これも最初は検問もなかったのが、のちには拘留されるものがふえ、人々はついには天津行きを恐れるようになった。

浦薛鳳は平津間の鉄道が回復すれば、郷里の江蘇省の常熟か首都南京にむかう予定で、はじめは城内の知人宅に滞在していた。しかし八月一三日に戦火が上海にまで拡大すると（第二次上海事変）、そうもできずに同僚の家族と共同で城内に家を借りて住む。日本軍の入城後は謡言がふえ、婦女への暴行の話などもよく聞かれたため、女性たちはやむをえない場合を除いて外出を控える。息の詰まるような「難民」生活である。このころかすかな砲声は何日かおきに聞こえ、飛行機は夜明けごろよく編隊を組んで飛んで行き、また東交民巷では日本人が「某地獲得」、「某城占領」と大書したアドバルーンを掲げていたという。

やがて長沙から南下を促す電報が何回か届き、浦薛鳳と同様に北平に留まっていた同僚たちもつぎつぎに単身で長

沙にむけて出発していく。浦薛鳳によれば、最後に梅校長から一〇月中に長沙に到着すれば九、一〇月分の給料は支給されるが、遅れた場合は到着した月分からしか給料は支給されないとの電報が届き、この電報が多くの人の心を動かし、南下を決意させたという。浦薛鳳もまたそうであり、六月末に出産したばかりの妻と四人の子供を日本軍占領下の北平城内にのこしたまま、一〇月一四日の朝出発する。

一方、北大では秘書長鄭天挺の前掲文によれば、蘆溝橋事変勃発のとき校長の蔣夢麟、文学院長の胡適等はいずれも北平に不在。間もなく法学院長、課業長他の責任者もつぎつぎに南下する。このため、北大の業務はすべて秘書長の鄭天挺にまかされ、八月某日、日本憲兵が北大事務室を捜査したときにも事務室はからっぽで、鄭天挺以外の責任者たちはみなとっくに避難してしまっていた。この間、校長とも連絡がとれず、鄭天挺が長沙臨大開設を知ったのは一〇月に入ってからのことであった。かれが長沙に速やかに送金してもらえるよう依頼したのはその後のことであり、為替が届いたのは一〇月の末。北平に留まっていた教授らは、そこでようやく続々と南下をはじめたという。そしてこの年の二月に妻を亡くしたばかりの鄭天挺もまた単身で、母のない五人の子供たちを北平にのこしたまま、一一月一七日の寒い朝出発したのであった。――鄭天挺の記述によるならば、連絡は清華の方が行き届いていたようである。ただし、天津の伯母宅に避難していた北大物理学系教授の呉大猷が長沙臨大開設を知ったのは九月との記録もある。[10]

（一九九〇年一〇月一三日）

注

（1）長沙臨大の学部・学科組織は次のとおりである（一九三七年一〇月二日通過）。

文学院　中国文学系、外国文学系、歴史社会学系、哲学心理教育学系。
理学院　物理学系、化学系、生物学系、算学系、地質地理気象学系。
工学院　土木工程学系、機械工程学系、電機工程学系、化学工程学系。
法商学院　経済学系、政治学系、法律学系、商学系。

(2) 一九三八年一月二〇日第四三回常務委員会義における決議。ただし法商学院院長の方顕廷は休暇中で、陳序経（南開）が同年四月一九日に就任。また文学院院長の胡適は蔣介石の命をうけてアメリカに飛び、長沙には未着のため、馮友蘭が同年四月一九日から代理、同年一〇月一八日院長に就任。

(3) 一九三八年一月二〇日第四三回常務委員会義における決議。

(4) 西南聯大を一九四四年に卒業した楊樹勲の回想によれば、大学二年になって叙永分校から昆明にもどったとき（四一年九月頃か）、こういわれていたという（「卅年往事説従頭」）。

この他に、当時は「北大老、師大窮、只有清華燕京可通融」（北大は老けており、北師大は貧しく、清華と燕京大のみ金持ちだ）ともいわれていた。

(5) 張起鈞「西南聯大紀要」。

(6) 本稿第二章三八頁参照。

『北京大学校史』三二四、三二五頁には、「大部分」の教師学生が抗日戦争の前線または後方にむかった。かれらのうちのある者は近くの遊撃区にはいり中国共産党の指導のもとに抗日遊撃戦に参加した。またある者は延安あるいはその他の地区に身を投じ抗日救国運動に従事した。そして南下して後方の困難な条件のもとで教学を続行したのは「一部分」の教師学生

であるという。

また一説には、何千もの学生が軍務についた。だが大多数の学生と圧倒的多数の教師は学校に留まったという。

(7)『中国現代史』(遼寧人民出版社、一九八四年)、四〇九頁。

(8)『中国現代史大事紀事本末(黒竜江人民出版社、一九八七年)、八一四頁。この千名近い学生の戦死者というのは、先の五千名あまりの戦死者のなかに含まれるのかどうか。「南苑の兵営内にいた千名近い平津地区の学生」というのも、また費自圻、翁同文らと同じように夏休み中の軍事訓練に参加していたものなのか。だとすれば、どこの大学の学生なのか。西苑では七月二一日に解散というが、南苑では解散の時期を逸して戦闘に巻き込まれてしまったものなのか。学生の軍事訓練がどの程度の規模でいつから実施されたものなのか、すべて未詳。

清華一九三五年入学の翁同文の「従入学時説起」には、三七年の夏休みに政府は西苑の兵営で大学生の集団訓練を実施し、清華からはかれの学年が参加と記すのみで、他の学年や他大学のこと、また南苑については何もふれられていない。

(9)浦薛鳳はまた同文中において、学生たちがこのように本当に困窮しているか否かにかかわらず一律に学校から金を借りようと群れをなして騒ぎたてるのは、わが民族青年の「劣根性」の現れであるとも記している。

(10)呉大猷「我在抗戦中的西南聯大」。